

## 活動的な高齡者のコーピング力の構造と関連要因

## —地域の高齡者活動拠点参加者へのアンケートを通して—

○ 四天王寺大学 畑 智恵美 (2946)

笠原 幸子 (四天王寺大学・2556)

キーワード：高齡者 主体的活動 コーピング力

## 1. 研究目的

人生を生きることにおいて、悔いのない人生を送りたいというのは共通の思いであり、たとえ介護等他者の支援が必要となったとしても、その人らしさを引き出し支えることが高齡者支援の現場では求められている。そこでは、高齡者にとって「自分らしく生きる」というのはどのようなことなのかを理解しておく必要があると考える。それを探る手がかりとして、活動的に過ごされている高齡の方々の「コーピング力」に着目した。

コーピング力とは様々な状況において、物事をどのようにとらえ、対処するかという姿勢や考え方であると考え、どのような構造をもち、どのような要因が関連しているかを探ることを本研究の目的とした。

## 2. 研究の視点および方法

活動的な高齡者のコーピング力を測る尺度として、青年期を対象に開発された「精神的回復力」<sup>(1)</sup>尺度を援用した。コーピング力は、高齡者にとっては、これまでの経験で培われてきたことに基づいていると考え、その構造と関連要因を仮説として設定し、アンケート項目を作成した。調査項目は、性別、年齢等基本属性のほか、①日常生活における主体的行動や考え方に関する設問(8項目)、②コーピングに関する設問(21項目)、③主観的幸福感<sup>(2)</sup>(12項目)、④高齡者観<sup>(3)</sup>(9項目)である。

調査対象は、A県内の2つの市内の老人福祉センター等活動施設を自身の意思で利用される方々である。活動施設の管理責任者にアンケートの趣旨を説明し、調査の受け入れの許可のあった日時(2017年4月～8月)に活動場所を訪問した。アンケートへの協力の了解を得られた方々にその場で自記式にて回答を得た。合計7か所の活動拠点で合計350名の協力を得られた。回答に欠損項目のない238名を分析対象とし、分析にはSPSSver. 25を用いている。

## 3. 倫理的配慮

アンケート実施に当たっては、まず事前に、活動施設の責任者宛に「アンケート調査許可願い」を提出し、直接訪問してその趣旨を説明した。また、回答をお願いするにあたっては、協力いただく方々に対して「アンケートの目的と結果の活用方法」について書面配布に加えて、無記名であること、含まれる個人情報に関しては、すべて統計的に処理し、特定されるような扱いはしないことを口頭説明した。そして、了解の得られた方のみ、その場でアンケートに回答していただいた。なお、本研究計画は、四天王寺大学研究倫理審

査委員会の審査を受け、承認を得ている。

#### 4. 研究結果

回答者の平均年齢は 75.9 歳、男性 24.8%、女性 75.2%であった。また、独居 34.0%、夫婦世帯 41.6%、その他(子どもと同居等)24.4%であり、居住の平均年数は 34 年であった。また、回答者の 84%がまあ健康・健康としており、暮らしぶり(経済的)はふつうが 62%であった。

①日常生活における主体的行動や考え方に関する設問(8項目)、②コーピング力(21項目)、③主観的幸福感(12項目)、④高齢者観(9項目)に関しては因子分析を行いその下位因子構造を確認した。そして、コーピング力の4つの下位因子(好奇心・肯定的未来志向・自己コントロール感・否定的気分の調整)をそれぞれ従属変数として、その他の変数を独立変数とした重回帰分析を実施した。その結果を下表に示す。値は、標準化係数 $\beta$ 値であり、有意なもののみ示す。

従属変数 独立変数	新しいことへの 好奇心	肯定的な 未来志向	自己 コントロール感	否定的な気分の 調整(-項目)
年齢		-0.110※		
①周りの意見を聞く姿勢				0.197※※
①日ごろからの主体的姿勢	0.266※※※	0.120※	0.262※※※	
③幸福感(判断行動への自信)	0.236※※	0.223※※※	0.265※※※	-0.264※※
③幸福感(肯定的人生観)		0.255※※※		
③幸福感(失望感のなさ)		0.115※		-0.281※※※
④肯定的高齢者観		0.226※※※	0.132※	
④否定的高齢者観				0.129※
調整済み R <sup>2</sup>	0.327	0.503	0.325	0.267
F 値	10.6※※※	21.0※※※	10.5※※※	8.20※※※

有意水準： ※0.05 ※※0.01 ※※※0.001

#### 5. 考察

因子分析により高齢者のコーピング力は4つの下位因子に分類された。いずれの因子もクロンバッハの $\alpha$ は0.75以上であり、内的一貫性が示された。また、年齢、性別、主観的健康観や経済状況はコントロール変数として投入しているが、年齢以外は有意ではなかった。表に示す結果より、地域の老人福祉センター等活動施設において積極的に活動されている方々は、自身の健康状態や経済状況に影響されることなく、自己コントロール感をもって好奇心を忘れず、肯定的に未来を捉えて「自分らしく生きる」を実現されていることが示された。このような高齢者の思いは、これまでの人生で培われてきた「自分自身の判断や行動への自信」であり、「日ごろからの物事に対する主体性」にも表れている。また、「肯定的人生観」や「肯定的な高齢者観」が重要であることも示された。支援が必要となった場面においても、このような高齢者自身が抱いてきた思いに寄り添い支えていく支援の在り方が求められると考える。なお、本研究は、科学研究費助成事業・基盤研究C・15K04020の一部として行ったものである。

(1)堀洋道監修『心理測定尺度集VI』サイエンス社 2011, pp. 145-149. (2)堀洋道監修『心理測定尺度集VI』サイエンス社 2011, pp. 199-203. (3)柴田博ほか編著『老年学入門』川島書店 1993, pp. 180-184.